

# 1. 認知症高齢者の症状に対するイメージについて

## －実習前後でみたイメージしづらい症状の比較－

○小松 桃香（西神戸医療センター）、島田 莉緒（甲南病院）、白井 伶奈（神戸市中央市民病院）、橋本 恵梨子（尼崎総合医療センター）、鈴木 千絵子（関西福祉大学看護学部）

### I. はじめに

平成 24 年の厚生労働省の発表によると、65 歳以上の高齢者のうち認知症高齢者は 462 万人であり、これは 10 年前（平成 14 年）に報告された人数に比べ 312 万人増加している。今後ますます認知症高齢者が増加することが考えられ、認知症看護に関するケアや質の向上が求められる。井上ら（2013）は認知症症状を実習前からイメージすることでより認知症高齢者を理解することができることを報告している。そこで私たちは、看護学生の認知症高齢者の症状に対するイメージについて、実習前後でより具体的な症状について検討することにした。さらに、イメージと知識の関連や興味との関連についても実習前後で比較・検討したのでここに報告する。

### II. 研究方法

研究対象者は、関西福祉大学看護学部在籍する 3 年生 88 名、4 年生 88 名の計 176 名。データ収集・分析方法は、質問紙を用いたアンケート調査。看護学生の実習前後（3、4 年生）のイメージしづらい症状および知識の差、イメージと興味および知識との関係についてマンホイットニー検定、 $\chi^2$  検定にて検討。さらに平均点以上以下で高低得点群に分けたイメージ 2 群と興味 2 群において知識との関連を検討した。統計ソフトは、SPSS17.0 for windows を使用した。

倫理的配慮としては、調査に対する参加の任意性やプライバシーの保護について文書と口頭で説明した。さらに回収したデータは厳重に管理を行い、研究が終了した時点で速やかに破棄すること等も書面と口頭で説明し、同意を得た。また、関西福祉大学倫理委員会の承諾を得て行った。

### III. 結果

回収数は 3 年生 54 人（61.3%）、4 年生 42 人（47.7%）。一番平均点が低くイメージしづらかった症状は両学年とも「失認」（3 年生  $10.94 \pm 4.5$  点、4 年生  $11.17 \pm 4.8$  点）であった。認知症症状に対する知識は、4 年生の平均点は 3 年生より高く（3 年生  $20.76 \pm 2.8$  点、4 年生  $20.81 \pm 2.9$  点）、項目得点で低かったのは 3 年生で「失語」（ $2.70 \pm 1.1$  点）、4 年生で「失認」（ $3.26 \pm 1.0$  点）だった。知識が高得点だがイメージ出来ていない人は 3 年生で 21 人（38.9%）、4 年生で 12 人（28.6%）。知識が高得点でイメージ出来ている人は 3 年生 18 人（33.3%）、4 年生 16 人（38.1%）で有意差は認められなかった。興味得点は、4 年生（ $2.17 \pm 0.7$ ）の方が 3 年生（ $1.96 \pm 0.6$ ）より有意に高かった（ $P=0.007$ ）。知識の高低得点群と興味あるなし群間には 3、4 年生間ではともに有意な差は見られなかった。

### IV. 結論

イメージしづらい症状としては、「失認」「失行」であり、失認では「手の指が何指なのか分からなくなる」、失行では「急須にお湯を入れて湯のみにそそげない」「立体図形や絵の模写ができなくなる」であった。3、4 年生ともに認知症への興味が「すごくある」「まあまあある」と答えた人の方が知識得点を平均点以上とった人が多かった。3、4 年生でみた実習前後では、イメージに関して有意差はみられなかったものの、イメージ得点の平均点を比べると 4 年生のほうが高得点であり、実習により認知症症状をより具体的なイメージへと繋げることができているといえた。